

地域の国際化と日本語教育の連携の試み －「外国人児童支援」を出発点として－

大石 寧子

OISHI, Yasuko

徳島大学国際センター

要旨：県内の外国人児童の増加に対し、昨年本学も含めた教育関係機関からなる支援協議会が徳島で発足した。本学の日本語教育は、この外国人児童への支援にどのように係わるかを勘案し、今年度実施案を作成した。一方、県内の小学校では「国際化」を掲げ、具体的な実施を試みているが、英語教育の導入をイメージしているものがほとんどである。そこで日本語教育を通しての試みを外国人児童にとどめず、外国人児童も含めて県内小学校の「国際理解教育」との連携を検討した。小学校の「国際理解教育」授業を通して、日本人及び外国人児童 留学生及び日本人学生との四者の協働について考えたい。また大学と教育委員会及び小学校との連携についても考察したい。

キーワード：外国人児童、国際理解教育、協働、子供の遊び、学生サポーター

1. はじめに

徳島県では外国人児童が少しずつではあるが年々増加の傾向が見られるが、散在状況にあるため支援が難しい。そこで 2012 年に徳島県教育委員会が中心となり県内の大学・国際交流協会・ボランティアグループによる「帰国・外国人児童生徒支援連絡協議会」が発足され、義務教育（小・中学校）における外国人児童の支援が検討されてきた。

発足以前より外国人児童は存在し、その支援は受け入れ小・中学校やボランティアグループが日本語指導を中心に地道に続けられてきている。この状況の下、徳島大学の日本語教育は、どう係わればいいのか、何ができるのかについて検討を重ねた。

2. 外国人児童の支援

2.1. 実施までの経緯

現在、外国人児童に対しての支援は、日本語力を付けることが第一義で、日本語力をさほど使わずとも可能な授業以外は、クラスから当該児童を出して、日本語の授業（取り出し授業）を個別に行っている。とにかく日本語力を付けなければ授業をはじめ学校生活を送れないのでやむを得ない方策であるが、外国人児童は、これをどう受け止めているのだろうか。協議会の中でいろいろな問題や事例を検討するうちに、彼らの尊厳について考えさせられた。自国であれば問題のない児童が、日本に来た途端、言葉の上である種の特別な児童になってしまう。そして自分の気持ちとは関係なく、日本語力を付けるためではあるが、クラスから取り出され、他の児童とは異なる扱いとなり、クラス

の中で特別な存在となる。特別な存在のままいつまでもなじめず、日本で希望を捨てて、結局、道を誤るケースも耳にする。またこの調査を進める中で、「取り出し授業」を断り、わからない日本語での授業の中で自力で日本語を獲得した外国人児童がいた。面談時に「自国では特別な学生ではなかったし、取り出されて特別な授業を受けたこともなかったの、日本だからと言ってその必要はないと思った」と聞いた。このことは、取り出されて、特別な児童になることを良しとしない彼なりの意思表示ではなかったかと思われた。

これらの調査から、外国人児童をクラスに受け入れたことを「異文化理解の一助になるいいチャンス」と学校側に理解され、本人も輝ける時間や機会がないものかと考えた。そこで日本人児童に向けて「自国の学校文化」の紹介や「自国の遊び」を実施する機会をつくり、それを徳島大学の留学生が支援すれば、双方の学びになるのではと考えた。

2.2. 協働という視点で

外国人児童による「自国の学校文化」の紹介や「自国の遊び」の実施は、外国人児童にとって発信する立場になり、尊厳が維持でき、日本人児童に対して異文化理解のきっかけの提供者となれるのではないだろうか。「遊び」を中心にしたのは、子供なら誰もが素直に心を開いて、興味・関心をもって溶け込めるのではと考えたからである。そしてそれを徳島大学の留学生が支援することは、留学生にとっても異文化理解の大きな学びとなろう。また本学日本人学生からなる学生サポーターを本プログラムへ取り込むことで、日本人学生は、外国人児童と

日本人児童・留学生の協働に加わることができ、実感を持った異文化理解の一助になり、外へ目をむける大きな機会となろう。そこで共通教育の「日本事情Ⅲ・Ⅳ」に「子供の遊び」をテーマとして取り込み、外国人児童・日本人児童・留学生・日本人学生の四者が、異文化理解という1つの方向に向かって話し合い、触れ合い、学び合う協働ができるのではと考えた。

2.3. 小学校の「国際理解教育」との連携

教育委員会との連携のもと外国人児童の支援を実施をすることになり、打ち合わせを重ねていくうちに、対象の外国人児童の国籍と留学生の国籍の一致が難しいことが問題として浮上してきた。徳島での外国人児童は、中国・フィリピンの順で多いが、本学にはフィリピンからの留学生は皆無である。一方、県内の小学校から「国際理解教育」のカリキュラム遂行のため、本学に英語圏または英語話者の留学生派遣要請がしばしばあることがわかった。また今年度のはじめに教育委員会の留学生派遣希望の呼びかけに対し40の小学校から要請があった。林原(2010)によると児童の中に内在する国際理解に関する興味・関心の因子として①外国語習得②異文化体験③貧困・戦争などの国際的課題④国際交流があると分析されている。本学の試みの中に①②④が含まれていることなどから外国人児童のみを対象とするのではなく、本学の試みを「国際理解教育」との協働という視点に広げることとした。小学校の多くが国際化＝英語圏留学生の派遣と考えているようだが、英語を身に付けることは決して悪いことではないが、それだけで国際化へ向かうのだろうか。日本語教育が果たせる役割もあるのではないかと考えた。

3. 授業の構成

3.1. 「日本事情」コース

留学生を対象とする共通教育授業の日本事情Ⅲ(前期)、日本事情Ⅳ(後期)(注1)では、「日本・徳島を知る」を主テーマとし、日本語を使って調査や発表をする形態をとっている。前期は、「子供の遊び」を、後期は「小学校教育制度」を副テーマとして、①調査・発表②専門家の話を聞く③小学校での調査・実践を行うこととした。小学生が受け身でない体験を通しての異文化理解はもとより外国語習得の有効性への気づきも狙いとした。また本取り組みを支援する日本人学生からなる「学生サポーター」を組み込み、日本人学生の異文化理解を促すことも目的の1つとした。

3.2. 「子供の遊び」

前期の授業の中心テーマを「子供の遊び」とした。留学生は①自国と日本の遊びの比較を通し異文化を理解する②調査のためのアンケート作成・自国の遊びの説明書作成・発表を通し日本語力の向上を図る。また児童は子供本来の興味を持って受け身でない体験を通し、異文化を理解することを目的とした。

授業では、ごく基本的な日本の小学校制度を学んでから、まず「日本の子供の遊び」を調査した。遊びは、小学生が対象の誰もが知っているものとし、アンケートを作成した。回答をもとに学生サポーターから遊び方などの聞き取りを行った。全く予想のつかない日本独特の遊びがある一方、自国にも同様な遊びがあることを知り、次の「自国の遊び」の説明書の日本語化にスムーズに移行できた。学生サポーターとピアワークを通し子供の遊び特有の日本語の語彙や表現を獲得し、遊び方の説明書を作成した。また留学生と学生サポーターとで小学校での発表や遊びの際の役割や手順の打ち合わせは、授業外にも積極的に個々に行われた。小学校では、まず日本語による遊び方(ルール・勝ち負け・罰など)の説明をしたあと、一緒に遊んだ。作成した説明書は、小学校の窓口教員に渡し、これ以降も機会があれば遊べるように配慮した。

3.3. 「日本の教育制度」

後期の中心テーマは、日本の教育制度とし、日本の小学校の制度や学校文化について分担し調べ、発表した。調査の前にまず自国の学校制度について発表を行った。後期の留学生に日本語能力の差が見られたので、その差をならし、学校語彙を獲得する目的もあった。次に日本の学校制度・学校文化の調査項目を学生自身で話し合っ決めて、分担した。その内容の主なものは①日本の学校制度②小学校制度・規則③教科・授業時間・休み④課外活動⑤委員・係⑥給食・掃除⑦保護者会・家庭訪問などをはじめとする親の係わり方などである。また「自国の遊び」についても学生サポーターとのピアワークを通して説明書の作成を行った。

3.4. 専門家の話を聞く

日本の教育制度や徳島の小学校を理解するため、「徳島の学校を理解するためのハンドブック」をもとに徳島県教育委員会主事に講義を受けた。主な内容は、日本の小学校の教育方針②学校での一日③評価とその方法④入学に際し用意するもの⑤教員になるためにはなどで、これまでの自分の調査をもとに質疑応答を行った。

4. 教員の役割

教員はファシリテーターとして存在し、教育委員会と細かく打ち合わせをしながら、前期2校、後期2校の小学校を選定し、各小学校の窓口となる教員と小学校と大学が実施することを詰めていった。この準備の中で「国際理解」というテーマのもと三者が、今回の意義を確認し意見を交わし理解を進めていった過程は、大変意義深く、これもまた「国際理解教育」の一環と思われた。教育機関の国際化は、学生や児童だけではなく、教員自身の異文化理解の気づきや情報の収集が必須のことで、小学校と大学の国際化の大きな要素であると思われる。

4.1. 小学校での内容

4.1.1. 大学側—パッケージの提供

前述の話し合いの中から4校が「交流」の枠を超えてより確かなものを期待していることがわかった。そこで主となる①「子供の遊び」のほかに②各国の小学校情報を含んだ「お国紹介」③各国語挨拶の練習④各国の学校文化（今回は中国の「目の体操」）の実施とし、この4つをパッケージにして4校で行った。②～④はPPTやカードを使用しながら全員の前で行い、①の遊びは、国毎にグループを形成し、時間の許す範囲で、何か国かの遊びの体験をした。また留学生は児童の案内で校内見学や授業見学、給食、掃除などの体験もした。

4.1.2. 小学校側—児童主体の試み

小学校では、留学生の国について事前に調べ、留学生による「お国紹介」を通し、さらに理解を深めた。学校によって調べたことを校内の廊下の壁に貼り校内見学をする留学生を驚かせたり、クラスに留学生を1人ずつ招き入れ、自分たちで考え準備したこと（日本文化の発表やゲームなど）を一緒に行ったり、校内見学の説明や給食や掃除を共にしたりといろいろな試みがあった。

5. 「子供の遊び」を通して得たもの

小学校側（5・6年生）のアンケートで、児童から出た回答の主なものは以下のようなものである。

- ① 留学生の日本語での説明が上手で驚いた。自分も外国語が話せるようになりたい。
- ② 一緒に遊べたのがとても楽しかった。もつといろいろな国のあそびもしたかった。
- ③ 色々の国の文化がわかって面白かった。
- ④ ほかの国の小学校の様子がわかって、よかった。
- ⑤ 留学生が来ると聞いてから、ワクワク・ドキドキしていたけれど実際会ったら日本語

がペラペラで、やさしかったし、安心した。

①に関して予想外に多くの児童からの声が聞かれ、当初の狙いが達成でき、国際化へ直接の役割ではないかもしれないが、児童の心に敷居が高くなく入り込め、異文化理解と外国語習得の動機づけになったことは間違いなく、ここに日本語教育の役割があるのではないだろうか。また⑤にあるように多くの児童が、外国人と接した経験がなく⑤と同様な状況にいたこともわかった。この状況の下で、「子供の遊び」を一緒にしたことは②の声が多かったことから、受け身でない実体験が効果的であったことがわかった。

小学校の教員からは、以下のような声があった。

- ① インターネットで調べられないような話がよかった（各国の小学校事情、目の体操、町の様子など）。
- ② 外国の人が一生懸命日本語を話すところがいい。
- ③ 児童と留学生が個人レベルで直接に言葉を交わしながら交流できたことがよかった。
- ④ 少し惜しいのは、児童に興味・関心のある国であれば、もっと事前学習をして、もっと質疑応答ができたと思う。
- ⑤ 「遊び」を取り入れたのは、心の垣根を取り払うために手取り早く、心を開き易くよかったと思う。
- ⑥ 子供達にわかりやすいように紙媒体や目に見えるように遊びの手順表を渡しては。
- ⑦ 遊び方は、事前に教えてもらえれば、授業で説明しておいて、当日もっと遊べたと思う。

など、様々な意見が見られ、順次改善できるものは試み、効果的なものは取り入れていった。留学生からは、以下のような声が多かった。

- ① 小学校での発表や遊び・見学などを通して、日本・徳島を知ることができた
- ② 説明文の書き方や説明の仕方、PPTの作成とその発表のスキルを学んだ
- ③ 子供達と遊んだのが何より楽しかった

などの声があった。

また学生サポーターからは、以下のような声が聞かれた。

- ① 知っているつもりだった留学生の国が更に理解できた。

- ② 担当留学生と共にこの流れの中で一緒に頑張り、連帯感が得られた。

徳島県教育委員会学校政策課（2013）「徳島の学校を理解するためのハンドブック」

という声（注2）が聞かれた。

6. 終わりに

今年度から始まったばかりのこの試みは、教員のアンケートからもうかがえるようにまだまだ荒削りであることは否めず、次年度は更に質を上げていきたい。その一方留学生をはじめ外国人の日本語力や異文化理解について小学校の教員にもっと多くの情報の提供が必要なことを感じ、本センターがすべきことも見えてきた。しかしアンケートや現場での様子から「遊び」を軸とした異文化理解の気づきを促す視点は、心を開いて入りやすく児童・留学生・日本人学生に効果が見られ、適切だったのではと思われた。またこの試みを通じて、それに係わる教員や教育関係者に対しても異文化理解へのきっかけになったのではと思われる。これらのことから次年度も継続して実施していきたい。そして多少形は異なるかもしれないが、この英語版の試みも次年度の課題としたい。

注1. 前期受講留学生：8名（中国6名、ラオス1名、スウェーデン1名）

後期受講留学生：9名（中国3名、マレーシア1名、ベトナム1名、ラオス1名、スウェーデン1名、イギリス1名、アイルランド1名）

注2. 文体及び漢字への変換以外は原文のまま掲載

参考文献

林原 慎 他（2010）「小学校国際理解教育における国際交流学習効果」『広島大学学部・附属学校共同研究機構紀要』第38号 P41-46

加藤 巖 他（2009）「国際理解教育プログラム「アジアシリーズ」の実践と効果-児童向けアンケートの結果を中心として」『和光大学総合文化研究所年報「東西南北」』P174-192

池田玲子・舘岡洋子（2007）『ピアラーニング入門 - 創造的な学びのデザインのために』ひつじ書房

大石寧子（2012）「日本語教育を支援する『サポーター』の現状と課題」『徳島大学国際センター紀要』P19-25

佐藤 学（1997）「学びの対話的实践へ」『学びの誘い』東京大学出版会 P49-91

(参考資料1)

子供の遊び 「スウェーデン」

遊び名：カラスのように (Hoppa kråka)

対象年齢：10~14 歳

その他の情報：2人以上、テニスボール、壁のあるところ

遊び方：

- ① 参加する人は、2・3メートルのところ壁に向かって、たて1列に並ぶ。
- ② 列の一番前の人壁に向かって、下からテニスボールを投げて当てる。
- ③ ボールが地面にはずんだら、投げた人はボールを跳んで越える。跳べなかったら、アウトになる。ボールが足を触れたら、アウトになる。
- ④ アウトになった人は他の人のほうに向いて壁に立つ。投げる人はアウトになった人の頭の上にボールを投げないといけない。
- ⑤ 次の人はボールを受けて、同じことをする。受けられなかったら、アウトになる。
- ⑥ 最後に一人残った人が勝つ。

友達を助けることもできる。「~を助きたい」と言って、その人の頭の上にボールを投げて、跳ぶことができれば、友達は助かる。

この基本的な遊び方が簡単すぎてあきたら、もっと難しくすることもできる。たとえば①ボールがはずむ前に1回転しないといけない、②ボールがはずむ前に一回手をたたかないといけない。そして、手をたたく回数をどんどん多くしていく（この遊び方はとても人気がある）など。



(参考資料2)

子供の遊び 「ラオス」

遊び名：マッティー (ຫມາກຕີ້)

対象年齢：5～11 歳

その他の情報：人数が多い方が楽しい

遊び方：

- ① 先ず、2 人を選ぶ。(選び方：体が大きい人や力がありそうな人を選ぶ。)
- ② 選ばれた 2 人がジャンケンして、勝った人が先に自分のメンバーを 1 人選ぶ。
- ③ 次には負けた人が 1 人を選ぶ。このように繰り返して、それぞれ自分のチームのメンバーを決める。
- ④ 遊ぶ範囲（例えば、この柱からその柱まで）と 2 つのチーム間の距離を決める。2 つのチームが陣地を決める。
- ⑤ 味方の 1 人（A さん）が代表して、敵のチームの人を捕まえ行く。行くときにずっと“ティー”と言い続ける。敵の陣地にいる敵をタッチしようとするとか自分の陣地に戻ろうとするときに敵達も A さんを引っ張ろうとしたり、A さんにタッチされないようにしたりする。もし、A さんがタッチしに行く途中や自分の陣地に戻る途中に“ティー”を止めたらアウトになって、敵の陣地に行かなければならない。逆に A さんが“ティー”を言い続けている間に、A さんにタッチされた人は A さんのチームにつかまって、陣地につれて行かれる。
- ⑥ 一番初めにつかまった人は片手で柱に触って、もう一方の手は他の捕まった人とつないでいて、自分のチームの人が助け（タッチすること）に来るのを待つ。タッチされたら、自分の陣地に戻れる。メンバーが全部タッチされたチームは負けになる。